



日本レイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信 No.74

日本レイ・アームストロング協会 (ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF) 2012年12月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 Tel.047-351-4464 FAX047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp
ホームページ <http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf/>
発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

Welcome to Japan! ニューオリンズのみなさん、ようこそ日本へ!

10月5日午後、ジュニアバンド一行21人、元気に笑顔で成田到着 15日までの長〜い夢のような日米“ジャズと愛の交流”を実現させた

2012年10月5日、ティビティナス・インターン・バンドとオー・ペリー・ウォーカーズ・チョーザン・ワンズ・ブラスバンドの一行21人は、予定通り成田国際空港に到着し、15日までの11日間、横浜→仙台→石巻→気仙沼→仙台→千葉(TDL)→東京を回る夢のような日米“ジャズと愛の交流”を果たした。いまになって思うと、あれはやっぱり夢だったに違いない。どうしてあの時、頬をつねってみななかったのだろう。でも、ここにちゃんと“証拠写真”が残っていた。今回の「会報74号」は、そんな“**Dreams come true.**”の場面をたつぷりと再現してみた。 (小泉良夫)



どこへ行ってもTOMODACHIが待っていた!

(写真左上から下へ) ①早稲田大学ニューオールリズジャズクラブと(東京) ②石巻ジュニアジャズオーケストラと(石巻) ③勢揃いして多賀城「ブライト・キッズ」と(仙台) ④東北学院で(仙台) (写真右上から下へ) ⑤出発する一行のバスに手を振る気仙沼「スウィング・ドルフィンズ」(気仙沼) ⑥「グローバル管楽器技術学院」ではワーっ!とVサインでお見送り(東京) ⑦「横濱ジャズプロムナード」で出会った神奈川県立生田東高校の吹奏楽部員と(横浜)

**待ちに待った外山夫妻との再会の日
あの顔この顔…テレビ・クルーが追う**

Welcome to Japan! やってきました、ニューオリンズからのジュニアバンド一行21人。ティ

ピティナス・インターン・バンド(以下=ティピティナス・バンド)とオー・ペリー・ウォーカーズ・チョーズン・ワンズ・プラスバンド(以下=OPWバンド)のあの顔この顔…。

10月5日(金)午後2時、成田空港第2ターミナルの到着ロビー「B」に次々と元気な姿を見せる。外山喜雄・恵子夫妻はじめ、フレッシュな早稲田大学ニューオリンズジャズクラブの面々、国際交流基金と日本ルイ・アームストロング(WJF=ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション)のスタッフらが出迎える。ハグし、肩をたたき合い、握手を交わす…感動の“日米ジャズの絆”。テレビカメラもしっかりとこの交流場面を追っていた。

**トランペットの天才少年もやって来た
ウォーカー高校生は粋なカッターで**

一行の乗ったAA175便は、成田に定刻13:30到着。ロビーでは早稲田ニューオリ面々ら、日米の国旗をあしらった赤と白の帽子をかぶり、歓迎プラカードを手に手に、入国を待つ。一足早く出てきた金髪のスチュワーデスが、この光景に「オー・サンキュー!」と微笑む。出てきました。長身で金髪の引率者、ベサニー・ポールセンさん。彼女を



先頭に今年の夏のティピティナス財団創設者、ローランド



&メアリー夫妻の豪邸でも、会っているトランペットの天才少年ジョン・マイケル、クラリネット奏者のウィル、ギターの手ハンター。ちょっと遅れてお揃いの粋なベージュのカッターシャツ姿のローリンズ先生やジャスティン、ジャロン、ジョーダンの3トランペッター…みんな今年の夏、「サッチモの旅」で出会っている。かっこいいし、にこにこして可愛い!

写真はいずれも成田空港での歓迎風景

**バスに乗り込むと突然のジャズ
さあ、日本初公演の横浜へGO**

さっそく両替に走ったりしていたみなさんが揃うと、ツアー・ガイド兼通訳の篠原茜さんに導かれて迎いの貸し切りバスに乗り込む。すると突然バスの中からジャズ・サウンド! 先ほどから急に姿が見えなくなっていた早稲田ニューオリのみなさんが、外山夫妻共々、後部座席に陣取って歓迎セッション「聖者の行進」を始めたのだ(写真右)。そう、成田空港は規制が厳しくて、ジャズの演奏なんてルイ・アームストロング・ニューオリンズ国際空港ならともかく、ここではまったくの御法度。



バスは午後2時40分、空港を出発し、浦安経由で横浜に向かった。翌6日の「横濱ジャズプロムナード」(横浜みなとみらい21・ランドマーク・プラザ(13:00~14:20)での日本初公演に出演する。

**OPWバンドは伝統のブラスバンドで登場
ドナルド・ハリソンさんは何と「モーニン」!**

一夜明けて6日(土)は、ジュニアバンドの本邦初公演「横濱ジャズプロムナード」(横浜みなとみらい21ランドマークプラザ)への出演。“関内・みなとみらいを中心に横浜の街にJAZZがあふれる!”という日本最大のジャズ・フェスティバルとか。

OPWバンドは午後1時からの出演に備えて正午前から、宿泊ホテル近くの「びっくり・ふしぎ館コスモパニック」前できっちり練習。たまたま通りか



かった神奈川県立生田東高校のブラスバンド部員の女の子たちが駆け寄り、英会話を駆使して、さっそく



日米交流(1面に写真)。同世代の女の子たちに囲まれて、みんなキャッキゃとはしゃぎまくる。焼売弁当も用意されたが、「演奏が済んでからでいい」。



演奏会場となったランドマークプラザ屋内広場



は超満員で、見上げると、3階…いや、もっと上の方も聴衆でびっしり。まずは外山喜雄とデキシーセインツで幕開け。演奏が熱気を帯びてくると、ティピティナス・バンドのリーダー、ドナルド・ハリソンさんが“飛び入り”。あのアート・ブレイキーのジャズ・メッセンジャーズでアルト・サクスを吹いていたという超ベテラン。今度の来日にもアルト持参だったから、きっと何かサプライズがあると思っていたが、セインツを巻き込んで最初から飛び出しましたあのジャズ・メッセンジャーズが、一世を風靡した「モーニン」。これに

はお客さんも大喜び。セインツのレスポンスも素晴らしかった。

セインツのメンバーは、外山喜雄(tp,vo)、外山恵子(p,bj)、粉川忠範(tb) 鈴木孝二(cl)、藤崎羊一(b) サバオ渡辺(ds)それに、この日は広津誠(ts)が加わった。

次いでOPWバンドは伝統のブラスバンド・スタイルで葬送曲を奏で、客席後方から登場し大喝采を浴びる。

彼らのここ横浜をはじめ、東北各地での演奏曲目は、「Bourbon Street Parade」「Paul Barbarin's Second Line」「When the Saints Go Marching in」「Talking Loud」などとなっていた。

**高らかにジョン・マイケルのペット響く
ティピティナス・バンドは彼が主役!?**

ティピティナス・バンドはなんといっても天才少年のジョン・マイケル(tp)が主役のようだ。高らかにトランペットを吹きまくる。ステージの熱気が客席に渦巻き、テレビカメラが回る。3バンド1時間30分の熱演だった。



終わると一行は、貸し切りバスに乗り込んで東京駅へ。車内では横浜から

東京駅までずっと、ローリンズ先生が一生懸命に、日本語の挨拶を猛訓練。「私たちは、日本に来て、とても幸せです。お招きいただきありがとうございます。どうぞ私たちの演奏をお楽しみ下さい。ありがとう、お友達のみなさん!」。東北の各地でこれを何回も披露するうち、だいぶ上手くなって、演奏に劣らず大喝采を浴びる。「演奏」というところに「Nso」とルビを振っているところなんか、思わず微笑んでしまう。さあ、17:56東京発の東北新幹線「こまち37号」に乗って仙台へ。

**和食も特訓してきた箸を上手に使うって…
千羽鶴のプレゼントには中にWelcome**

7日(日)朝、仙台のホテルの朝食は、納豆に味噌汁、漬け物…といった簡単で純粋な和食。ニューオリンズで特訓してきた

という箸を上手に使う(写真右)。

でも、納豆は、さすがにちょっとつまんで

「ん!?! これはダメだなあ」という子もいた。朝食を済ますと、すぐにバスで1時間ほどの石巻へ向かう。テレビ局のマイクロバスが併走して

追ってくる。途中のバスのなかで、多賀城のブライト・キッズOB、千葉隆壺君(東北学院・中2、ドラム&トランペット)から一行全員に千羽鶴が送られた。折り紙を開いてみると、中にOB5人からの英文メッセージがプリントされていた。要約すると「ニューオリンズのみなさん、長旅でようこそ。日本での素晴らしい思い出を沢山作って下さい」といった感じ。ローリンズ先生は、折っては広げ、広げては折り返し(写真上)…それに日本語の挨拶の練習にも余念がない。

**石巻ジュニアジャズオーケストラと交換
津波被害のライブハウスを舞台に演奏**

さあ、「石巻ジュニアジャズオーケストラ」(以下=石巻JJ、石垣敦事務長)との交歓が待っていました。このバンドは、日本レイ・アームストロング協会(WJF=ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション)や「みやぎ音楽支援ネットワーク」(事務局代表=佐々木孝夫さん)などの援助で、今年6月23日結成されたばかり。ここ「ワークショップ&リハーサル・石巻」の会場となったライブハウス「SOUL TO SOUL」周辺は、3メートルほどの津波に襲われて、建物も道路も流され、漁船まで突っ込んだという被災地。ま



だ復興の最中で未舗装の道路、破壊されたままのコンクリートの地肌が痛々しい。ワークショップではハリソンさんがティピティナス・バンドを“公開指導”して、この日は「チュニジアの夜」を演奏していた。これも素晴らしかったが、この曲は残念ながら、この場限りだった。石巻JJは、柏原英彦さんの指揮でハービー・ハンコックの「カメレオン」や「セントルイス・ブルース」などを演奏した。ニューオリンズの一行も加わって、リハーサルもなかなかの盛り上がりを見せる(写真下)。

ニューオリンズのWWLテレビの超有名キャスター、エリック・ポールセンさん(ベサニーさんのご主人)や「よく間違

われるのですが、私たちは大阪ではなくて、アメリカのテレビ局ABCニュースですよ」という若い女性クルーは、

カメラを回し、マイクを持ってインタビューするなど一人二役。一行のニューオリンズ帰着と同時にこのWWLニュースが速報として伝えた。

ABCは来年、



ニューオリンズにも取材に来てくれるそうだ。

地元の報道陣も多数取材に駆けつけていた。

公演会場は、お隣の「石巻まちなか復興マルシェ」。ステージの回りに模擬店なども出ていて大賑わい。テレビなどですっかり有名になった福島・浪江町の人気者、浪江焼麺太国(なみえやきそばたいこく)の太王(だいおう)、八島貞之さんも姿を見せ、愛嬌を振りまく。コンサートの前にステージで地元のアイドル



アメリカ大使館から贈られた「TOMODACHI」のTシャツ姿で全員、ハイ、パチリ! = 石巻「SOUL TO SOUL」で

(?)らが AKB 風のダンスを披露すると、太王とともに TOMODATHI の T シャツ姿で、OPWバンドのメンバー

も踊り出した。会場は早くもフィーバー(写真右)。

会場にいたご近所の女性がため息混じりに教えてくれた。「でもね、津波のあと、ここは普段はずっと、ほとんど人通りがなくなっちゃったところなんですよ」と。



渡された。このバリトンサックスなど、手渡され子の背丈ほどだった。この贈呈楽器を手にテレビインタビューを受けた2人だったが、その後ろの橋は津波で破壊された欄干に未だそ

の傷跡が残されていた(写真左)。

この夜は、「イオンモール石巻」に出掛け、何でもありの広々とした「グルメ・モール」で思い思いの夕食をとって、市内のホテル泊。

ティピティナス財団からバリトンサックス WJFからはバストロンボーンが贈られる

午後2時半から1時間超の本番が始まる。(写真右、上から順に)石巻ジュニアジャズオーケストラに次いで、OPWバンド、ティピティナス・バンド、そして外山夫妻も加わって全員参加のセカンドライン、渦巻くサウンド…先ほどの女性のため息も吹き飛ばしてしまっただろう。

この場でティピティナス財団からのバリトンサックスとWJFからのバストロンボーンの贈呈があり、2人の女の子に手



“道の駅”やコンビニでのショッピング バスの移動も立ち寄りがまた楽しい

8日(月、祝)、石巻から気仙沼に向かう途中、国道346号線沿いのPA、道の駅「林林館・森の茶屋」(宮城・登米市)で、ショッピングも楽しむ。バスを降りると外は、気持ちよく澄み切った秋晴れの好天気。一行は清々しい“日本の秋”を味わったに違いない。バスツアーの途中、ほかでも、あちこちで道の駅やコンビニに立ち寄りたりして、束の間のショッピングを楽しんだが、みんな結構、日本円の小銭を(靴下に入れたりして)上手に利用している。自動販売機の操作も慣れたものだ(写真右)。インスタントラーメンにお湯を入れて箸を持ち、上手に運んでい



**今回は「スウィング・ドルフィンズ」と交流
手作りイルカのマスコットのプレゼントも**

8日(月・祝)は朝から気仙沼へのバスの旅。気仙沼ストリート・ライブ・フェスティバルに出演する気仙沼ジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」の応援に駆けつけるのだ。バスは海岸沿いを走り、家が流され土台だけが未だに延々と続く被災地を目の当たりにして、一行は目を見張り、息をのむ。ここは我々も始めて見る被災地だ。

「ワークショップ&リハーサル・気仙沼」の会場となった

気仙沼市地域交流センター(ワン・テン内)には、もうすっかりお馴染みの「スウィング・ドルフィンズ」の会長で指揮者、須藤丈市さんはじめ子供たちや保護者のみなさんが揃って笑顔と拍手の出迎え。手作りのイルカのぬいぐるみのプレゼントなども行われた。

演奏会場はすぐ近くの広場。ここも超満員。報道陣もますます増える。各バンドは乗りまくる。ハリソンさんはマイクを握り、正面に飛び出して歌う。どの会場でも、お客さんに立って立ってと呼びかけ、聴衆を総立ちにしてシャウト、またシャウト!

外山さんも負けずに飛び出す。ハリソンさんの挨拶がまた良かった。「私は小さいときからイルカ、ドルフィンが大好きだった。スウィングするジャズも大好きだった。その両方をたしたような『スウィング・ドルフィンズ』は、ほんとう



に素晴らしい!」。

東北のどの会場でも、トランペットの一吹きを合図に「イエーッ!」と右手を挙げ、これに呼応して、ニューオリンズからの一行と子供たちのバンドが揃って、「セカンドライン」を演奏する。これが、今回のツアーで定番となった。大勢のセカンドラインを従え、大歓声の中、会場を行進して回った光景が、いまでも鮮明に脳裏に焼き付いている。

OPW高校の引率者として来日した、まるでお相撲さんのような体格のタレンス・デーヴィスさんは、どの会場でも、こう説明していた。

「ルイ・アームストロングはもとより、著名なジャズ・ミュージシャンは、ほとんどみんなブラスバンドの出身です。ブラスバンドは演奏する方も楽しいのですが、それを聴く方々も一緒に楽しんでいます。どうかみなさんも、ともに楽しんで下さい」

**卒業して高校生になり、退団したOBも
次々とフレッシュな部員が加わって来る**

コンサートの会場には、被災当時の「スウィング・ドルフィンズ」のメンバーだった懐かしい顔ぶれも、応援に駆けつけ、外山夫妻との再会を喜ぶ。中学を卒業して「スウィング・ドルフィンズ」を退団、高校生になってしま

った! ? のだ。「スウィング・ドルフィンズ」も、新しいメンバーが加わり、次々と若返っていく。でも来年、ニューオリンズへ行くとしたら、あの子たちと一緒にきたかったなあ。ま、しょうがないか。みんな高校の吹



奏楽部で活動をしているという。

帰りのバスに一行が乗り込むと、ドルフィンズの面々が駆け寄り、手を振り盛大な見送り。たまたまにジョン・マイケルが窓を開け、身を乗り出して応える(前ページに写真)。彼、気仙沼のホテルに戻ると、ホテルの前で両手を広げて、大声で叫んだ。「I love Japan!」。

最大の被災地で合掌、追悼の演奏… あの日、みんなここですべてを失った

9日(火)は、朝から気仙沼でも、最大の被災地となった港周辺へ。バスを降りた一行は、未だに大きな漁船「第18共徳丸」が津波で陸に押し上げられたままの現場へ。新聞など各種の記録写真

集でも、この漁船を中心に周辺が瓦礫の山に埋もれた被災直後の、まさに想像を絶する“破壊された街区”の航空写真が掲載されている。そのためもあって連日観光客が後を絶たないというが、これまた地元の人たちの悩みの種。地元の方の話では、「週に1度は周囲を大掃除しています。もう空き缶、ボトルは散らかし放題。なかには町名が入った大きなビニール袋に集めたゴミを入れてそのまま置いていった観光客もいるんです」。

ちなみに我々のバスには、大きなゴミ袋20枚が用意されていて、ゴミ集めには気を配っていました。

この漁船を津波の記念碑的として保存すべきか、嫌な思い出として撤去するのか、意見が分かれているようだ。外山さんへのメールで、「スウィング・ドルフィンズ」の須藤さんは、「この大きなスクリューの下に、ドルフィンズのメンバーの家があったのです。その先、500メートルぐらいのところ到我家もありましたが、すべて流されてしまいました」と。外山さんは、「メールを読んで、、、ジーンとこみ上げてきました」。

ここに一行を案内し、被災前後の写真パネルまで持ってきて説明してくれた気仙沼寿司組合長、寿司処「大政」の清水直喜さんも、この地ですべてを失った。「津波に襲わ

れて逃げる途中に声を掛け合った5人の方々は、みんな亡くなりました。逃げるのが、あと5秒遅かったらダメだったでしょうね。私の家族も、はらばらで女房と、犬だけが一緒

に逃げました。私たち家族は、すべてを失いましたが、みんな命だけは助かりました。私の孫娘は、『スウィング・ドルフィンズ』にいたんですよ。別々でしたが、この子も無事に逃げて、いま高校のブラスバンドで活躍しています」と。

一緒にいらした地元の方

の話では、この漁船は、路上を津波に押し流されて、滑るように走り、橋の欄干も傷つけずに、その上を通過してきたそうだ。「見なければ良かったんですが、子供たちも、高台からみんな見てしまっって、もう3日間、震えが止まらなかったんですよ」。

この漁船は、被災する翌日が漁に出航する予定でタンクの燃料は満タン。これが爆発、炎上したら悲劇はさらに大き

くなるころだったが、東京消防庁の救助隊が、いち早く駆けつけ、未然に防いでくれたという。この方は「みんな、本当に東京のみなさんには感謝しているんです」とも。

清水さんの説明を聞いたあと、漁船の脇に作られた“慰霊碑”に合掌、「主の御許近くに歩まん(Just A Closer Walk With Thee)」の演奏を捧げた。みな黙して言葉はなかった。

バスは、気仙沼から約3時間かけて、再び仙台へ戻る。

to Sendai again



**次は「ブライト・キッズ」が待っている
すっかり有名になって洗練された!?**

成田→横浜→東京→仙台→石巻→気仙沼→再び仙台。
いったんホテルに戻って9日(火)夕刻、仙台市宮城野区文化センターで、多賀城ジュニアジャズオーケストラ「ブライト・キッズ」との交歓。まあ次から次です。この文化センターには、大きなとても素晴らしいPaToNa(パトナ)ホールがある。

待ち構えたこの日のブライト・キッズは全員、お揃いの白いシャツに蝶ネクタイといった、これまで見かけてきた普段着姿とはすっかり違って見違えるような洗練されたファッションだった。そんな明るさとは裏腹に、セインツの藤崎羊一さん(b)が、彼らを迎えに行ったバスの中で、この子たちのこんな話を耳にしている。みんなずいぶんと怖い目に遭っているようで、何人かは未だに亡霊のような透明な幻を見て、おびえていると話合っていたというのだ。鳥肌が立つ。

ステージは午後6時から7時半まで。
ここでのクライマックスは「聖者の行進」と「上を向いて歩こう」をミックスして、編曲した力作の演奏。ピアニストでア



レンジャー、そして仙台の「定禅寺ストリートジャズフェスティバル」の実行委員長でもある榎原光裕さんの編曲。なんと



と「上を向いて歩こう」を作曲した中村八大さんの息子さん、中村力丸さん(写真左)も、聴きにいらしていた。力丸さんは、2年ほど前までサラリーマンだったが、いまは「上を

向いて歩こう」が、まもなく50周年を迎えるといい、「いま、この曲にちなんで、いろいろプロデュースしているんです。この曲は、悲しいときや、嬉しいときにも、ぴったりで何か希望を与えてくれるんですね」と。そう、震災後のコンサートでも、あちこちでよく演奏されたものだ。

ブライト・キッズの演奏は「セサミストリート」や「マッシュケナダ」など。このブライト・キッズと一緒にニューオリンズの一行と、「ジャズ・ミー・ブルース」など仙台のライブハウス中心に活躍されているプロのアルト・サクソ奏者、「遊びに来ていたらつかまっちゃった」という名雪祥代さん、それにももちろん外山夫妻も加わってのセッション。おまけに仙

臺阿伝祭連(せんだいあうんますら)の「仙台すずめ踊り」やら、角田市のハイソサイエティー・デキシーランドジャズバンドや仙台のデキシーバンド、ジャンピングクロウの演奏も続いたものだから、なかなか豪華なコンサートとなった。

コンサートのなかほどで、平野達男復興大臣(代理・岡崎トミ子衆院議員)

からティピティナ

ス財団とオー・ベリー・ウォーカー高校に、今回の東北演奏旅行に対する感謝状の贈呈があった(写真上の右上段)。

そして、ここでも最後は、セカンドラインの大パレード。

**盛大に東北ツアー打ち上げの交流会
「ジャズ・ミー・ブルース」に全員集合!**

9日(火)午後8時から今度の東北ツアーを中核となって支えてくれた佐々木孝夫さんの粋なジャズカフェ「ジャズ・ミー・ブルース nola」でいわば打ち上げのレセプション。主だった関係者が全員揃って乾杯! お料理もドリンクもいっぱい。

外山ご夫妻、佐々木さん、そしてみなさん、本当にご苦労さま。お疲れ様でした。

この席で、「スウィング・ドルフィンズ」の最年少トランペッター、

岩渕天音さん(気仙沼中学

1年、12歳)から英語で感謝のメッセージが送られていたので、これを恵子さんが代読。

「今日は、私たちのために気仙沼まで来

ていただいてありがとう。(自己紹介) 私の家は昨年、津波に襲われ、母と再会できたのは3日後でした。私の家族は全員無事でした。私たちの街が大きな被害を受けたことはとても悲しいことでしたが、ニューオリンズから楽器が送られてきた時はとてもうれしかったです。そして今日、みなさんにお会いしたこともうれしいことです。来年、ニューオリンズを訪問できることを楽しみにしています。私はトランペ



(写真上から)①乾杯! ②WWLキャスターのエリック・ポールセンさんと佐々木孝夫さん、外山夫妻(右から) ③天音さんの英語のメッセージを代読する恵子さん ④千葉君からエミリーさんにプレゼント=いずれも仙台「ジャズ・ミー・ブルースnola」で

ッターになりたいと思っています。もっと一生懸命、トランペッターを勉強し、練習します。今日は一日中本当にありがとうございました(要約)

五線譜上にきれいなローマ字で書かれた英文が、ジャズのように響き、踊っているようだった。

ブライト・キッズ OB の千葉隆壺君からティピティナス財団に陶器のメロノームのプレゼントもあった。ジャズの演奏こそなかったが、大いに盛り上がったレセプションだった。中締め3本締めが続いて、「伊達政宗一本締め」が飛び出したのも、さすが地元ですね。なんだかんだで、ホテルに戻ったのは午後10時を過ぎていた。

**東北ツアーで初めて午前中の自由時間
東北学院で最後の交流会も盛り上げる**

10日(水)は、東北ツアーで初めて午前中が自由時間となった。昼食

さあ、どこへ行

(写真下) …と

ているうち、全

らばらでどこか

ってしまった。

ケードの商店

追っていったが、まったく見失ってしまう。大きなCD店があった。ここかも知れないなあ。いました! ティピティナスのジョン・マイケルと数人を確認。まあ、放っておいても大丈夫でしょう。のんびりCDなどを眺めている。ほかに、ウィルバート先生などは100円ショップで買い物を楽しんだようだ。外山夫妻は、駅に戻って、ここはやっぱり「牛タンですよ」と、牛タン通りで舌鼓。元気を付けて、さあ、東北最後の「ジャズ交流・イン・東北学院中・高等学校」へ。

この学校は、何やら田んぼのど真ん中にドーンと立派な校舎が鎮座している。まさに名門校の威風。校門に入ると、黒い詰め襟の学生服(もう東京では見かけないので、なんとも懐かしかった)姿の生徒さんが「Welcome to Sendai!」と



3週間、渡米していた生徒さんとか。

まで、

く?

思っ

員ば

へ行

ア

ー

街を

追っ

たが、

ま

ま

書か

れた

段

ボール

をも

って

出迎

え(写

あの千葉君も入っている同校吹奏学部およびマーチ

ーさんの挨拶エリックさんのインタビューなどがあつた。こ

ングバ
ンド部
員(40
人)と
広々
として
荘
厳な礼



こでも千
羽鶴の
プレゼン
トが配ら
れた。食

拝堂での交歓。やはり詰め襟の学生服の一团が、「ブルースカイ」などを演奏。指揮者の大森廣さんに「音楽の先生ですか?」と聞いたら、「いや、数学の教師です、ははは…」ですって。ここでも、ニューオリンズ両バンドと外山夫妻らも加わり、全員で大ジャムセッション、そして、セカンドラインで締める。



事に入っ
て、ちょっ
ぱり静か
になっ
たところ
で、ステ
ージでも
華麗な
ダンスを
披露し
ていた
“吹奏楽
部のマイ
ケル・ジ
ャクソン”
こと、菅
野隆之君
(c1、高
2)が、こ
こでも踊
り出



出して、食事を盛り上げる。お母さんの一枝さんは、同吹奏学部保護者会の会長で、この交流会にも出ていて、隆之君の活躍ぶりに目を細める。

(写真左上から)①東北学院吹奏学部&マーチングバンド ②ティピティナス・バンド ③OPWバンド (写真右上から) ④&⑤全員で「セカンドライン」のパレード ⑥コンサートを終えて食堂に移り一緒に食事と交流会=いずれも10月10日、

そんな交流会も、そこそこにして午後7時、慌ただしく学校を出て仙台駅へ。20:01発の「やまびこ68号」に乗る。車内販売が来ていろいろ買ってはいたが、さすがの若者もぐったり、ぐっすり。東京着はジャスト22:00。

演奏が終わって全員、仲良く座って同校先生方やエミ



これがニューオリンズからの一行全21人。「私は、いいの、いいのよ!」って、いつも撮る方に回って、後ろの方に避けてしまうベサニー・ポールセンさんに代わって、あとから来日したご主人のWWLキャスター、エリックさん(前列左から2人目)が入っています。何やら卒業式の写真のようですが、ベサニーさん(左上)も加えて…=10月9日、仙台市宮城野区民文化センターで

Wed, Oct.10 return to Tokyo

**浅草・観音様&「十和田」で天井、ざるそば
1999年の楽器寄贈「そこにボクがいた！」**

11日(木)は午後1時に浅草すしや通りにある女将さん会会長でニューオリンズの名誉市民、富永照子さんのご招待、経営する手打ちそば店「十和田」で昼食。富永さんは、毎年夏、ニューオリンズからジャズバンドを招いて「ニューオリンズ

フェスティバル」を浅草で開催している超名物女将。フェスティバルは今年でもう26回を数える。

食事は豪華な

海老天井と特製ざるそば。

みんな割箸を器用に使って(来日前にさんざん練習してきた！)

美味しそうに天井を平らげる。ごはんのおかわりをするメンバーも。

ここでちょっとしたサプライズ。

外山さんが東北各地でコンサートの前に、これまでのWJFの活動をスライドやテレビのニュース画面を使って説明してきたが、その中の1枚に1999年9月、「サッチモの旅」でニューオリンズを訪れた際、プリザベーションホールでの

楽器贈呈風景があった。これを見ていたジョー・ダイソン(d s)が、「あ、この写真には写っていないけど、ここにボクもいたんだ！」と外山夫妻に告げたのだ。この写真は、私(小泉)が撮っていたもので、「それならまだうちのパソコン

にほかの写真も保存してあるから、こんど東京に帰ったら、



(写真左上から)①浅草・女将さんの「十和田」で、豪華なえび天井と特製ざるそばの昼食 ②お店の前で、お礼に1曲演奏 ③仲見世を抜け… (写真右上から)④雷門をくぐって… ⑤本堂に参拝 ⑥外山夫妻はジョーと思い出話に花を咲かせた



全部持ってきて見てみよう。ジョーが写っているかも知れない」ということで、この日、アルバムを作って「十和田」に



持参、ジョーに見せた。そうしたら、「わー、ここにも、ここにも…これ、後ろにいる白いシャツ(下の写真の矢印)の、みんなボクです」と驚く。13年前にタイムスリップした感じ。当時ジョーはまだ9歳。「あのころトロンボーンをやったかったんですが、まだ、背も低く、小さかったので、お前はトランペットだといわれました

た。ドラムもちょっとやっていたので、そのあとすぐに、お前はドラムを

やれって…。それが13年後に素晴らしいドラマーに成長して、外山夫妻のところに戻ってきた。何か

赤い糸で結ばれているに違いない。この話を聞いて、外山夫妻はホロリ、涙ぐむ。

それに「この子はいまアメリカンフットボールで活躍している。この子はTBCブラスバンドでトロンボーンを吹いて

いるよ」などとジョーの話はどんどん膨らむ。昼食後の浅草寺参拝時も、外山夫妻はジョーに付きっきりで思い出話を聞いていた。

「十和田」の前でお礼の1曲「バーボンストリート・パレード」のあと揃って浅草の浅草寺(観音様)へ参拝。雷門を抜けて仲見世通りをそぞろ歩き。本堂ではちゃんとお賽

銭をあげて、合掌もしましたよ。ちよっぴり珍しい団体なの

か、あちこちで盛んに声をかけられる。仲見世で扇子のお土産を買っていたハンター・バーガミー(g)など、どういっわけか修学旅行の小学生10数人に囲まれてサイン責め。特に理由はないというので、ハンターが一人一人、丁寧にサインしてあげている間、この子供たちに今回の東北ツアーのことなど、話して聞かせる。「へー！」なんて、サインを大事そうに眺めている子供も。

ツアー最後の報告会とミニ・コンサート 盛大に国際交流基金のレセプションも

浅草をバスで離れ、午後5時からいよいよ東北ツアー最後の公開報告会とミニ・コンサートが開催される四谷区民ホールへ。ここでもスライドを使った報告があり、外山夫妻

の総括、ニューオリンズ側からエリック&ベサニー・ポールセン夫妻のハリケーン被害の報告やら、OPW高校側からジュリアス・ヒル(tb)、ティピティナス側からレーベン・ウェバー(b)がエリックのインタビューに応じて「とても有意義なツアーだった」などと感想を述べる、エメリ

ー・メナード(ティピティナス財団)、それに交流基金の櫻井友行理事、仙台から駆けつけた佐々木

孝夫さん、ドナルド・ハリソンさんの挨拶など盛りだくさん。

早稲田大学ニューオリンズジャズクラブとニューオリンズの2バンドが演奏したあと、全員がステージに上ってツアーの定番「セカンドライン」。パレードが会場を回る。

このあと、会場すぐ近くの国際交流基金(本部)で同基金主催レセプション。仙台、横浜…多数のみなさんが出席。中村宏さん(ジャズ評論家、防衛医大名誉教授)夫妻らWJF会員の方々、前日本音楽家



(写真上から)①早稲田大学ニューオリンズジャズクラブ ②「セカンドライン」パレード ③全員でジャムセッション＝四谷区民ホールで ④石井さんと記念撮影に収まる OPW 高校 ⑤同じくティピティナス・サイド＝国際交流基金(本部)で

協会会長の石井一さん(参議院議員)も顔を見せ、ニューオリンズの一行との記念写真に忙しい。国際交流基金からステキな記念品、風呂敷のプレゼント。また、会場にいらした横濱ジャズプロムナード事務局長、鶴岡博さん(横浜JAZZ協会理事長、横浜スタジアム社長)からニューオリンズ2バンドに記念のジャズプロムナード公式ウィンドプレイヤーがプレゼントされた。

Oct.12 TDL Oct.13 Free time

朝から夜まで東京ディズニーランドを満喫 終日自由時間は楽器店巡りや秋葉原散策

明けて12日(金)は、東京ディズニーランド・ミュージック・フェスティバルでの公演。ニューオリンズ広場のシアター・オーリンズ(屋外)で30分ほど

演奏したあとは、東京ディズニーランドで終日、思いっきり羽を伸ばしてもらった。来日したその日、貸し切りバスで成田から横浜に向かう途中、車窓からTDLを左手に見て、大歓声をあげた一行だから、これはもう彼らにとっては待ちに待ったスケジュール。東京ディズニーランドは、このツアーで使用するス

ーザホンの貸与でも協力してくれた。

翌13日(土)は朝食後、それこそ

滞在中、初めての終日自由行動。かつてニューオリンズの「ルーツ・オブ・ミュージック」でヤングミュージシャンの育成を支援していた高田房子さんが、お茶の水の楽器店やら秋葉原散策を助けてくれていた。高田さんは、東北ツアーにも姿を見せ、小さいときからはしゃぎまくっていたというジャスティン・ウォーカー(tp)やジャロン・ウィリアムズ(tp)とは、もう“竹馬の友”みたいな関係。2人との再会の喜びようも知れる。さあ、翌14日(日)は、日本での最後の公演、「サッチモ祭」です。

**サッチモ祭はヤング・パワーが炸裂!
感動の輪が渦巻いたセカンドライン**

14日(日)は、いよいよ待ちに待った「第32回サッチモ祭」(東京ニューオリンズ・ジャズ・フェスティバル)。ニューオリンズのバンドの来日を待って、毎年7月に開催されてきたこの「サッチモ祭」、今年は2回も延ばしに延ばして夏の祭りが秋の祭りになってしまった。それでも熱気は灼熱のニューオリンズそのもの。ニューオリンズの2バンドが登場すると歓声と拍手がわき起こり、フィナーレのセカンドラインでは、客席すべてを飲み込んで感動の輪が渦巻いた。「サッチモ祭」の歴史に鮮やかな1ページを残した。

この日、会場となった東京・恵比寿のサッポロビール(株)エビスビール記念館には午前9時、スタッフ全員集合。いや、もう前々から荷物が運び込まれ、会場作りも前日から始まっていた。何よりも頼りになった

のは早稲田大学ニューオールリンズ・ジャズクラブ(以下、早稲田ニューオリ)の若いみなさん40人。受付、プログラムの配布、バンド連絡係、進行と司会援助、募金集めのパレード、裏方すべて…。全員が背中にサッチモを描いたスタッフの黄色い T シャツを着ての大活躍に、サッチモでなくても「オー・イエー！」ですよ。

午前11時半の開場を前に、エントランスには10数人の常連さんが列を作った。正午、この早稲田ニューオリを皮切りに演奏が始まる。司会は今年も山口義憲さん(WJF 会報「ワンダフルワールド通信」編集長)、外山恵子さん、飯塚さち子さんの3人。日本側の出演バンドは、早稲田ニューオリ、デキシー・ドラムカーズ、ザ・サーフサイド・ストンプ、ドクター・デキシーセインツ、ナッチェス・ジャズバンド、バンジョー・ストンパーズ、デキシー・ダンディーズ、セカンドライナーズ、ニューオリンズ・ジャズハウ

ズ、ハイトタイム・ローラーズ、キャナル・ストリート・ジャズバンド、大丸リユニオン・ジャズメン、デキシー・ショーケースのお馴染みの13バンド、それに外山喜雄とデキシーセインツが加わる。演奏時間は各20分。途中3回、20分間の休憩があり、外山喜雄・恵子夫妻を先頭に被災地支援パレードが会場を回る。

午後3時前三々五々、ニューオリンズのみなさんが開場に姿を見せる。みんな黒いスーツをばっちり決めて、こやかに挨拶を交わす。第3部が始まり、まずは一行の紹介。山口さんが得意の英語を生かしてちょっぴりインタビュー。結構みんなリラックスしている。

挨拶が終わると…おや、今年も来てくれたんですね。子供ジャズ姉弟の「サファリパーク Duo」琴音さん(tp)と郷詩クン(p)の飛び入りの特別演奏(写真左)。そう、支援パレードにも加わってくれたんです。



全員に「サッチモ祭」特製「シャツ 富士山を描いた 手作り扇子を贈呈

そして、午後5時半からの第4部。ティピティナス・インターン・バンドとオー・ペリー・ウォーカー高校のチョーズン・ワンズ・ブラスバンドの登場。「割れんばかりの拍手」とは、こういうことをいうんですね。記念品の贈呈もありました。WJFからサッチモのサインとロゴ、この日の全出演バンドのバンド名を背中に入



れた水色のTシャツを一行全員にプレゼント。お相撲さんのような巨漢の随行者、タレンス・デーヴィスさんには4XL! このTシャツ、会場でも販売しました。それにスタッフの細川ハテミさんが趣味のお友達と手作りの扇子も全員に。富士山が描かれているので、とってもいいお土産になりますね。そのあとセインツの演奏が入って、ここでもドナルド・ハリソ

ンズ、会場でも販売しました。それにスタッフの細川ハテミさんが趣味のお友達と手作りの扇子も全員に。富士山が描かれているので、とってもいいお土産になりますね。そのあとセインツの演奏が入って、ここでもドナルド・ハリソ

ンさん(as)を迎えての「モーニン」(前ページの写真下)。モダンジャズの名盤「サンジェルマンのジャズ・メッセンジャーズ」を彷彿させる熱演。ジャズ・メッセンジャーズにいたのだから当然！ セイントの出演は、外山喜雄(tp,vo)、外山恵子(p,bj)、粉川忠範(tb)、鈴木孝二(cl)、藤崎羊一(b)、サバオ渡辺(ds)。

アルト奏者でもある鈴木孝二さんが、ちらっと言っていました、ハリソンさんって凄いですねえ。「いま、日本の若手のアルト・サクソ奏者はみんな、彼をコピーしているほどです。まさか彼が日本に来ているなんて誰も知らないんでしょうね」。

全員のフィナーレが凄かった。傘が踊り、セカンドラインがみんな手をつな

ぎ、いつもは静観しがちだったティピティナス財団の随行者、エミリー・メナードさんとベサニー・ポールセンさんまで踊りの輪に加わる。ステージ前の客席が、このセカンドラインに完全に包み込まれてしまった。後日、外山夫妻が、関係したみなさんへのお礼のメールで、この光景をこんな風に表現していました。

「滅多に見せない少年たちの興奮と歓喜…ステキな夢を見せていただいた」と外山夫妻

<(前略) 最終日、サッチモ祭の盛り上がり、…特に、少年達のフィナーレの盛り上がりは、大変なものでした！ 田舎町のシャイな少年達の歓びが爆発して、…、地元で

も、滅多に見せない興奮と歓喜、…、サッチモ祭の観客で盛り上がったエビスビール記念館の素晴らしい雰囲気の中で、最高の演奏を聞かせてくれました。オーペリーの、普段はシャイなドラムの2人が、ドラムを他の人に託し、客席に飛び降りて、観客を立たせて、シャーマンのような顔つきでセカンドラインの無私の境地に入っていました！ あのように少年達が興奮して、祖先のアフリカの霊に憑かれているような光景は、…、本当に地元でも、滅多に見ることができません！ 私達、お陰様で、ジャズファン、ご協



力頂いた関係者の皆様と共に、すてきな夢を見させて頂きました。結構元気でしたが、少年達、…、きっと帰りの機内は、熟睡状態だったでしょう！！ 彼らも、機内で素敵な夢を見たと思います>

- 主催：日本ルイ・アームストロング協会
- 協賛：エビスビール記念館
(有)ノラミュージック
- 後援：アメリカ大使館
- 協力：サッポロビール株式会社
サッポロ飲料株式会社
独立行政法人 国際交流基金

**あの「グローバル管楽器技術学院」へ
楽器はみんなここから来たんですよ**

15日(月)。いよいよ最後の日を迎えた。一行は荷物のパッキングを終えて、バスに積み込み、成田に向かう前にもう一つの訪問先が待っていた。新宿区大久保にある「グローバル管楽器技術学院」(GWTA=Global Wind Instrument Technical Academy)。ご存じの方もおいででしょうが、ここは楽器輸入販売会社(株)グローバル(福田忠道会長)の系列。福田さんとはWJF 発足当時からの

お付き合いでニューオリンズや今回、東北各地へ送った新品の楽器を超破格値で譲ってくれて、譜面台の寄贈、郵送料の負担までしてくれている。その福田さんが理事長を務めているのが、この技術学院。これまでWJFに送られてきた中古の楽器はすべてここで無償で、新品同様の「完成品」にしてくれている。

ほとんどの寄贈楽器は長い間使われておらず、破損や故障しているものも少なくない。ここで修理していただかないと、とてもニューオリンズには寄贈できなかっただろう。そんな積み重ねでニューオリンズには、すでに800点近い楽器が送られているのだ。この学院のユニークなところは、修理ばかりでなく、それぞれが専門家から演奏家としての教育も受けていること。音楽教育も万全なのだ。そうでもなければ、修理した楽器を試してみるなどできない。みんな非常に優秀な音楽を愛する若者なのだ。

午後1時過ぎ、一行はここでも、事務長で金管技術主任講師の植田正之さんや先生方、30人ほどの学生さんに笑顔と盛大な拍手で迎えられた。目下、仕事上の室内や机の上には修理中の楽器や道具類がそこかしこいっぱい



で熱心に見つめる。それぞれが自分の楽器と同じものの修理現場をのぞき込む。おや？ ラッパの音が響きだした。そう、ここでは新しい楽器の開発も進められているので、珍しい楽器にみんなが手を伸ばし始めたのだ。リードのマウスピースを付けたり、先端をハート型にしたり、2本をくっつけて左右から2人が同時に吹けるようにしたトランペット。ちょっと変わったバルブトロンボーン…。それぞれ盛んに吹きまくり出した。そんなこんなで約束の1時間はあっという間に過ぎてしまった。外に出て行く一行をキャーキャー追いかけて行く学生さん。Vサインいっぱいの記念撮影(1面に写真)。

**大荷物に思い出も一杯詰め込んで…
再会を約して…みんな行ってしまった**

午後4時前、成田空港第2ターミナルビル着。バスから降ろされる一行の荷物が多いのは、改めてびっくりした。いつもは楽器と手荷物程度で移動していたが、まさかこんな

なに多いとは…。そういえば、この

大荷物は毎日、宅配便で行く先々に先回りして送っていたのだ。サッチモではないが、まさに一夜興業(One nighter)の連続だった。きっと思い出もいっぱい入って膨らんでいるのだろう。チェックインして、みんなが外山夫妻とお別れのハグ、握手を繰り返す。「また来年夏、ニューオリンズ



でお会いしましょうね」。出発ロビーから一人また一人と姿を消していく。みんな行ってしまった。何一つトラブルもなく、夢のようなツアーは無事終了した。でも、なんだか恋人との長い別れを惜しむような寂しさを覚える。ガイドさんだけが、人影が少なくなった椅子にぽつんと座っていた。「ええ、私はヒコーキが無事離陸するのをここで確かめます」。

一行がルイ・アームストロング・ニューオリンズ国際空港に無事到着したことをニューオリンズのWWLテレビニュースでエリックさんが速報、世界に発信する米ABCニュース、NHK国際放送も日本ツアーを詳細に追った。外山夫妻の元にニューオリンズのあちこちから「ありがとう」のメールが殺到した。

**ご寄付をいただきました
ありがとうございます**

- ◆内藤寿昭様 (世田谷区、賛助会員) 10,000円
- ◆福田忠道様 (株)グローバル会長 (新宿区) 20,000円
- ◆小川理子様 (大阪市) 30,000円
- ◆井上和弘様 (大阪市) 50,000円
- ◆松村善一様 世枝様 (千代田区、賛助会員) 100,000円
- ◆増山律子様 (宇都宮市、賛助会員) 100,000円

**宮城—ニューオリンズ青少年ジャズ
交流事業の共催者**

- *日本ルイ・アームストロング協会
(Wonderful World Jazz Foundation=WJF)
- *ティピティナス財団 (Tipitina's Foundation)
- *独立行政法人 国際交流基金
(The Japan Foundation)
- *協力:アメリカ大使館トモダチ・イニシアティブ
(TOMODACHI Initiative)



**2012年…夢が叶った素晴らしい年!
心から感謝!すべて皆様のご協力のお陰です**

外山喜雄・恵子

“銃に代えて楽器を”—活動をつづけて18年、今回、このような日米の子供達のジャズ交流が実現した事は、本当に夢のような出来事です。

銃と麻薬に囲まれるニューオリンズの子供達に贈った楽器は、2005年ハリケーン・カトリーナの突然の襲来で楽器をなくしたミュージシャンや学校への楽器支援と変わりました。そして、2011年思いもかけない日本の被った大震災、、、ニューオリンズから逆に恩返しのできる楽器が届きました!

日本から贈られた楽器で学び日本の大災害に楽器を贈ってくれた子供達と、楽器を贈られた被災地の子供達を是非共演、交流させてあげたい、、、そんな夢がその時生まれ、国際交流基金、ティピティナス財団、アメリカ大使館、みやぎ音楽支援ネットワーク他多くの皆様のご協力、そして長年応援して頂いた会員やジャズファンの皆様のお力を頂き、この交流が実現致しました。

この日本訪問と被災地の子供ジャズマン達との交流は、貧しい環境に住み海外旅行など夢のまた夢だったニューオリンズの少年達にとって、一生を変える様な画期的な出来事となりました。そして、津波で被災しなくなった楽器を贈ってくれた子供達の訪問と交流を、スウィング・ドルフィンズ他被災地の子供達も一生忘れることがないでしょう。

子供達の可愛いくて、温かい交流を見ることができた方々全員にとって、また私達にとっても、この交流は一生忘れられない出来事となりました。

オバマ大統領再選のニュースに世界が沸いています。先日来日したニューオリンズの高校生達にとって、また先生達にとっても、2012年はお陰様で素晴らしい年になりました。

皆様に頂いた応援に、スタッフ一同とともに、心から感謝申し上げます。

訂正: 前回国報 73号、4ページの「サッチモの旅」ニューオリンズ編で、「元スウィングジャーナル誌」の編集長ダン・モーガンスターンさんとあるのは、「元ダウンビート誌」の誤りでした。お詫びして訂正します。

***宮城県イベントでの「運営・制作協力」:**

みやぎ音楽支援ネットワーク

東日本大震災復興支援JSFプロジェクト

*協力:石巻ジュニアジャズオーケストラ

気仙沼「スウィング・ドルフィンズ」

多賀城「ブライト・キッズ」

*協賛:サッポロビール、サッポログループ

*横濱ジャズブロード実行委員会

*取材していただいた新聞各社、テレビ局

各社の皆様にも感謝致します。

ご協力ありがとうございました。

募集中!

♪ジャズを愛する皆様

どうか会員になって下さい!!

また皆様のお知り合いの方々に

ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

=WJF年会費=

一般会員(General Membership) ¥6,000

学生会員(Student Membership) ¥3,000

賛助会員(Friends of Louis Armstrong) ¥12,000

■会費のお振込み先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京 UFJ 銀行浦安駅前支店

普通 : 5175119“ワンダフルワールド”

お問い合わせは:WJF事務局

TEL: 047-351-4464

Fax : 047-355-1004

Email:saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会HP

検索エンジン:Yahoo,Google で

ルイ・アームストロング

「アフリカが甦ったよ!」と外山会長は興奮の面持ちで叫んでいました。サッチモ祭のフィナーレで、ニューオリンズの高校生たちの演奏がピークに達した時です。▼彼らの来日11日間のレポートをお届けします。成田空港—横浜—仙台—石巻—気仙沼—仙台—東京のツアーは、各地で温かい交流と大きな感動をもたらしました▼日本の各メディアもニューオリンズの高校生たちのことを大きくとりあげ、米国でもABCテレビなどで映像が流れました。ニューオリンズの新聞、タイムズ・ペキューン紙は、小泉WJF理事の写真をクレジット付で使用した記事を掲載しています▼この記事の中で、高校生たちは東京デイズニードでの演奏とパークをエンジョイしたことが最高に嬉しく、指導者のローリンズ先生の「実は私もデイズニードは初めての経験で、13歳の少年に戻ったようです」とのコメントが紹介されました▼今回の高校生来日は、日米の沢山の方々の協力で、夢が実現したものです。ありがとうございました。(山)

編集長から